

## 頭を下げる／頭が下がる



山口県に、深川倫雄和上という方がおられました（平成24年12月ご往生）。「勸学」という浄土真宗の最高学位を持ちながら、中央（京都）から一定の距離を置き、ひたすら親鸞聖人の説かれたみ教えを学ぶ立場を貫いた方でした。

お寺がある地域の名をとて「俵山の和上」と呼ばれ、毎年多くの僧侶が研鑽を積みに全国から集まっていました。ご法義に対する姿勢は常に厳しく、お叱りを受けた先輩方も数多くいると聞きます。

私（真光寺住職）は、和上を招いた北九州の勉強会に2・3度参加したことがあるぐらいですが、後に、和上が出版された本の朗読CDを作成する縁をいただきました。

その深川和上のご法話をまとめた冊子から一節。独特の毒舌で語られる言葉には、高い学識がありながらそれをひけらかさず、どこか温かみがありました。



あのね、お寺に参らん者とはあんまり付き合わんがいい（会場笑い）、お寺に参らん者と付き合うても何も教えてくれません。世の中のことしか教えてくれん。世の中ちゅうものは、人の評判の国であり、人間の比べあい・あの人いやらしい、そんな話ばっかり。何も教えてくれません。…

俵山には爺さんと婆さんばかりおる、若い者は何処に行ったかというと町におる、その若い者が町にあって、孫が大学を出て月給取り。

「あんたあ お仏壇持つとるか？」→（若者）「お仏壇はここにある」

「ここは俵山で、あんたあ広島ちゅうたじやないか、広島のあんた方にやお仏壇はあるか」→（若者）「ありません、ここにありやええじゃないですか」

「そんなことがあるかい、お仏壇を持って暮らすんだ。あんたは割合いい人間じや、割合いいちゅうてすまんが、何故割合いい人間になったかちゅうたら、あんたのお父さんお母さんがお仏壇にお仕えをしなさる後ろ姿を見たから。お父さんが頭を下げる、お母さんがお仏飯を盛る、その姿を見て育ったんだ、割合エエ子が育ったんだ。あんたの子も女房も、あんたが御仏前に頭を下げる姿を見たことが無いんだよ。大方、あんたの子はあまり上等じやなかろう。」ちゃんと言うことにしておるんだ。

『仏願の生起本末』平成十九年 西念寺報恩講 御満座のお説教 より

深川和上の言葉は、「仏壇を持たねばならない」という“決まり事”を押しつけているわけではありません。**私たちが人生の中で本当に出遇い、頭を下げていくべき（自然に頭が下がる）ものは何なのか**を問うているのです。考えてみれば、いわゆる「世の中」で、**私たちはすいぶん無理をして頭を下げていることが多いのでしょうか？**

親鸞聖人のご和讃に「本願力にあひぬれば むなしくすぐるひとぞなき（阿弥陀さまの本願・お念佛に出遇った者は、“むなしく過ぎた人生であった”と思うことは決してない）」という一節があります。心の底から頭が下がるものに出遇えたとき、そこから本当の「むなしく過ぎない歩み」が始まります。

